身体醜形懸念が内在する顔イメージに及ぼす影響

The influence of the body dysmorphic concern on internal facial image

1W173070-3　武井　まな　　指導教員　渡邊　克巳　教授

TAKEI Mana　　Prof. WATANABE Katsumi

概要：　本研究では，身体醜形懸念の傾向によって理想とする顔（理想像）の魅力度と自己と認識している顔（自己像）の魅力度に乖離があるのかを検討した。実験 1 では，質問紙による身体醜形懸念調査と，理想とする顔と自分に似ている顔を選ぶよう求める逆相関法（Reverse Correlation: RC 法）を行った。その結果を基に身体醜形懸念が強い群と弱い群の理想像と自己像を作成した。実験 2 では，別の参加者に実験 1 で作成された理想像と自己像の魅力度評価を求めた。結果，女性顔刺激においては，理想像でも自己像でも，身体醜形懸念が弱い群よりも強い群の方が相対的に魅力的に評価された。以上より，女性では，身体醜形懸念が強い人の方が魅力的な理想像を内在化していることが示唆されるが，加えて，身体醜形懸念が強い人の方が集団共通的な理想に一致する顔を理想としているとも考えられ，自身の顔の認知を多数が好むような画一的なものに変化させていると示唆される。

キーワード：顔，身体醜形懸念，理想，逆相関法

Keywords: Face, Body dysmorphic concern, Ideal, Reverse Correlation techniques

1 はじめに

身体醜形懸念の影響要因として理想像の存在が指摘されているが[1]，その理想像がどのような視覚的イメージとして経験されているのかは明らかになっていない。そこで，本研究では参加者が自分の顔をどのように認識しているかを表す自己像と，理想とする顔を表す理想像の可視化と身体醜形懸念調査を行い，身体醜形懸念の傾向と，自己像と理想像の魅力度の関連を検討した。自己像と理想像の可視化には，内在化されたイメージ（Classification Image: CI）を可視化する方法として妥当性が確認されている Reverse Correlation（RC）法を使用した[2]。

2 実験 1：自己像と理想像の CI 作成と身体醜形懸念調査

2.1 目的

日本人大学生に内在する自己像と理想像を可視化し，併せて各参加者の身体醜形懸念を測定することを目的とした。

2.2 方法

参加者　90 名の男女（女性 47 名，18-24 歳，平均年齢 20.7 歳）が実験に参加した。

刺激と質問紙　RC 課題には男女 107 名の顔画像を性別毎に平均化したベース顔にノイズを重ね合わせた顔刺激を用いた。また，身体醜形懸念調査には日本語版身体醜形懸念質問紙（J-BICI）[3]を用いた。

手続き　参加者は 2 つの RC 課題を行った後，J-BICI に回答するよう求められた。1 つ目の RC 課題では，左右に並んで呈示された 2 つの顔刺激のうち自分に似ている顔を選ぶよう教示された。2 つ目の RC 課題では，左右に並んで呈示された 2 つの顔刺激のうち理想の顔を選ぶよう教示された。各 RC 課題は 300 試行であった。

2.3 結果と考察

RC 課題において選択された顔刺激を平均化することにより各参加者の自己像と理想像を作成した。また，選択されなかった顔刺激を平均化することにより反自己像と反理想像を作成した。身体醜形懸念意識調査の結果，尺度全体での合計点において，女性の方が強い身体醜形懸念を持つ傾向にあることが示された（$t(78) = -3.101, p < .05, r = .33$）。

3 実験 2：身体醜形懸念傾向と各像の他者評価相関調査

3.1 目的

実験 1 参加者の 4 種類の顔像（自己像・理想像・反自己像・反理想像）の魅力度を他者評価によって調べ，実験 1 参加者の身体醜形懸念傾向との関連を調査することを目的とした。

3.2 方法

参加者　男女 74 名（女性 36 名，18-24 歳，平均

年齢 20.2 歳）が実験に参加した。

刺激　実験 1 参加者の 4 種類の顔像を基に刺激が作成された。まず，実験 1 参加者の身体醜形懸念調査の結果から上位 25%を身体醜形懸念が強い群（強群），下位 25%を身体醜形懸念が弱い群（弱群）とし，計 4 群（男性強群・男性弱群・女性強群・女性弱群）とした。郡内で各顔像は種類毎に平均化され計 16 個の像を刺激として用いた。

手続き　参加者は, 横並びに呈示された 4 個の刺激から「最も魅力的な顔」と「最も魅力的でない顔」を 1 つずつ選ぶよう求められ，計 56 試行であった。なお，参加者の負担を軽減する目的で，男性参加者には女性顔刺激のみ, 女性参加者には男性顔刺激のみが呈示された。1 試行で呈示される 4 個の刺激は Best-worst scaling[4]に基づき全 8 刺激（男性参加者 : 女性強群の 4 刺激と女性弱群の 4 刺激，女性参加者 : 男性強群の 4 刺激と男性弱群の 4 刺激）が均等に呈示されるような順序と組み合わせで呈示された。

3.2 結果と考察

刺激の魅力度は，「最も魅力的な顔」に選ばれた回数から「最も魅力的でない顔」に選ばれた回数を引き, 参加者間で平均することにより算出した。身体醜形懸念の傾向と各顔像との魅力度の関連を検討するために，4 種類の顔像（自己像・理想像・反自己像・反理想像）と刺激の身体醜形懸念傾向（強群・弱群）との間での比較を行った。女性顔刺激を男性が評価した結果, 女性顔刺激では自己像と理想像の場合において有意な身体醜形懸念傾向要因の主効果が見られた（図 1；自己像 : $F(1,55) = 22.37, p < .001$；理想像 : $F(1,55) = 9.16, p < .005$）。女性顔刺激では，自己像においては強群の方が，理想像においても強群の方が，魅力度が相対的に高く評価された。男性顔刺激を女性が評価した結果は紙幅の都合上割愛する。

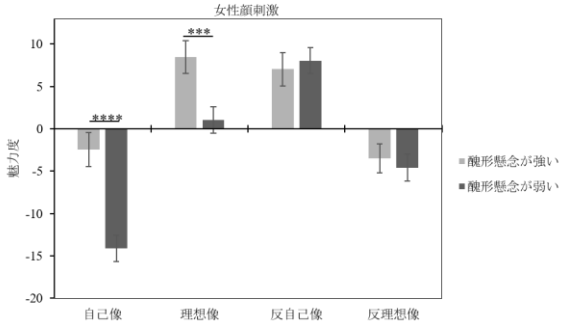

図 1. 女性顔刺激の魅力度の算出結果

（エラーバーは標準誤差，***$p < .05$, ****$p < .001$）

4 総合考察

実験の結果，女性顔刺激では，身体醜形懸念が強い人の理想像の方が，他者から判断される魅力度が高い傾向が見られた。これは，身体醜形懸念が強い人の方が魅力的な理想像を内在化していることを示唆していると解釈できるが，それに加えて，身体醜形懸念が強い人の方が集団共通的な理想に一致する顔を理想としているとも解釈できる。一方で，身体醜形懸念が強い人の自己像の方が，身体醜形懸念が弱い人の自己像よりも，他者から判断される魅力度が高い傾向が見られた。これは，身体醜形懸念が強い人は自身のボディイメージを世間の多数が好むような画一的なものに変化させている可能性が考えられる。それゆえに身体醜形懸念が強い人の自己像の方が，他者から判断される魅力度が高くなったのではないかと推察される。今後，容姿の理想イメージに関する知見が蓄積されれば，メディアや広告での応用に繋がり，現代社会における画一的な美の基準に抑圧されない社会に向けた基礎知識を蓄積できると考えられる。

引用文献

[1] Thompson, J. K., Schaefer, L. M., & Menzel, J. E. (2012). Internalization of the thin-ideal and muscular-ideal. *Encyclopedia of body image and human appearance*, *1*, 499-504.

[2] Dotsch, R. & Todorv, A., (2012). Reverse Correlating Social Face Perception. *Social Psychological and Personality Science, 3(5),* 562-571.

[3] 田中勝則・有村達之・田山淳（2011）. 日本語版 Body Image Concern Inventory の作成 心身医学，*51*，162-169.

[4] Burton, N., Burton, M., Rigby, D., Sutherland, C. A. & Rhodes, G. (2019). Best-worst scaling improves measurement of first impressions. *Cognitive Research: Principles and Implications*, *4*, 36.